

『ナイチンゲール伝 図説 看護覚え書とともに』 人格のリアリティから 生きた時代までの理解が 深まる

著：茨木保／定価：本体 1,800 円＋税
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



看護を代表する人物といえばナイチンゲール。彼女ほど数多く取り上げられ、議論されている人はいない。そのなかで、今回の『ナイチンゲール伝』の魅力をあげるとするならば、1つは、著者が医師・歴史研究者(科学者)として、あくまでも事実の正確さを追求している点であり、もう1つは、漫画家(芸術家)としてナイチンゲールの体験の生々しい強度や色彩を伝えつつも、テンポの良い文章と構成の妙により、最後まで飽きずに読ませる技巧が施されている点だと思う。読み始めたとき、漫画にしては多すぎると思った量の文字も、この作品のもつ2つの重力(執念?)に引き寄せられ、一気に最後まで読みきってしまった。

いたずらにナイチンゲールを神聖視しない、公平なまなざしもこの作品の魅力である。看護の関係者だとそうはいかない場合もある。看護にきわめて近く、しかし看護を専門としない医師という立場が奏功したと思う。そのためかナイチンゲールの人物の多面性があますことなく描かれており、読み手は「どう受けとめればよいか」という困惑を経て、しまいには「いやもう、これはありのままに受けとめるしかない」と諦念にたどりつく。ナイチンゲールは、可憐、繊細、きわめて賢く、高潔である一方で、極端、強情、とんでもない暴君でもある。そんな多面的なナイチンゲールから、肌で感じるような人格のリアリティが伝わって

る。意外にも読後感は穏やかである。

本書は2部構成になっており、第I部「ナイチンゲール伝」の後に第II部「図説『看護覚え書』」が配置されている。II部では『看護覚え書』の要点が、絵や図とともにまとめられている。ナイチンゲールの文章はどちらかといえば散文的なので、このように要点をまとめてもらえると把握しやすく、わかりやすい。加えて、第I部でナイチンゲールの生きていた時代や彼女の生きざまを知ったうえで読むと、『看護覚え書』の理解もよりいっそう深まるし、彼女のものごとの本質を見抜く観察眼の鋭さ、思考力の強靱さ、そして思い描いたビジョンを実現する行動力の粘り強さを感じることができる。

ナイチンゲールに関する言説は繰り返され、時代のニーズを反映して少しずつ変化してきた。すでに聖女のイメージは時代遅れとなり、今日の保健医療福祉分野の改革の必要性から、改革者としてのナイチンゲールの姿に光が当たっている。個人としての彼女が、どのようにして家族、性別、宗教、科学、医療、社会などの、暗黙かつ、ときに巨大な権力をもつシステムに立ち向かったのかを、多くの人々が彼女の伝記を通じて学ぶようになったとき、変化はさらに勢いを増すかもしれない。死んでなお、大きな影響力をもつナイチンゲールへの畏怖と、そんな期待をもたせてくれたお勤めの一冊である。